

# 大学における短期海外研修プログラム開発と実践の試み

藪田 由己子

## Developing Effective Study Abroad Program for College Students

Yukiko Yabuta

**要旨** 本稿では、清泉女学院大学・短期大学における短期海外研修について、現在のプログラムが完成するまでの経緯を述べる。短期海外研修を異文化間能力育成プログラムとしてとらえ、2014年に本格的に改革に着手し、プログラムの目的設定、活動内容の再考、事前研修5回、事後研修2回の導入、研修の単位化を行った。Deardorff (2006) の異文化間能力のピラミッドモデルをプログラム改革の基盤とし、2016年度からは6つの研修プログラムを運用するに至った。

**キーワード** 短期海外研修、異文化間能力、異文化コミュニケーション、海外体験活動

### 1. はじめに

清泉女学院大学・短期大学（以下、清泉女学院）では、2016年度において、夏休みに4つ、春休みに2つ、合計6つの短期海外研修プログラムを運営している。参加者は毎年のべ60～70名で、どのプログラムもコンスタントに参加者を集めることができている。この形態になるまでには、多くの教職員が関わり、様々な過程を経てきた。1987年に第1回の海外研修がアメリカ・カリフォルニア州にて行われたのをはじめとし、1991年にアメリカの Saint Joseph College、1995年に韓国の漢陽女子大学、2009年にモンゴルのチョイ・ロブサンジャブ言語文明大学、2010年にアメリカの Kapiolani Community College、2012年に台湾の国立高雄第一科技大学と提携を結んできた。海外研修開始から2010年頃までは、これら提携校を足掛かりとして研修プログラムを立ち上げ、学生を海外に派遣することが大きな目標であった。その後、2010年に「産学連携によるグローバル人材育成推進会議」が創設され、全国的にグローバル人材育成が高等教育機関の使命の一つとして位置付けられるようになった（産学連携によるグローバル人材育成推進協議会, 2011）。この頃から短期海外研修であっても、それは単なる海外旅行ではなく教育の一部としてとらえられるようになり、「見る旅」から自らが選んで「歩く旅」へ、そして渡航前に獲得された知識と現地での体験を学びの文脈に変換していく「学ぶ旅」へと変化してきた（藤原, 2013）。近年では学生に海外渡航を経験させるだけの研修はほとんどなく、体験のアウトカムからいかに学生が学びを得ることができるかが、海外研修における重要事項となっている。本稿では、筆者が国際交流センター長として務めた期間に携わった、6つの海外研修プログラムの改革の過程、研修に伴い導入した事前事後研修と単位化、そして最後に今後の展望について述べたい。

### 2. プログラムのベースとなる異文化間能力育成

プログラムの改革は、2013年に構想を開始し、2014年から着手した。2013年以前にも清泉女学院においては複数の海外研修プログラムが運営されていたが、いくつかの課題があった。1つ目に、研修における学びの目的が設定されておらず、何を学びとするかは参加者個人に任されていたこと、2

つ目に、事前研修が十分ではなかったため、渡航先の知識をしっかりと得ることなく研修に臨んでいたこと、3 つ目に、研修の学びを振り返り自分なりに消化する機会がなかったことが主な課題として挙げられていた。

これらの課題を解決し、より深い学びを参加者に与えるために、清泉女学院の海外研修プログラムを支える理論を検討した。その前提として、海外研修プログラムの大きな目的を「異文化間能力 (intercultural competence) の育成」と定めた。異文化間能力のモデルで代表的なものは、Deardorff のモデルであろう。Deardorff (2009) は異文化間能力を、「自分が持っている異文化に対する知識、態度、スキルを使って、効果的にコミュニケーションしたり異文化の環境でふさわしい振る舞いができる能力 (p. 479)」としている。図 1 は Deardorff の提唱する異文化間能力を示したピラミッドモデル (Pyramid Model of Intercultural Competence) である。このモデルは、①態度 (Requisite Attitude)、②知識 (Knowledge and Comprehension)、③スキル (Skills)、④望ましい内的結果 (Desired Internal Outcome)、⑤望ましい外的結果 (Desired External Outcome) から成り、下の要素から上の要素へ段階的に発達していくモデルである。一番下には態度があり、その上に知識とスキルが置かれ相互に影響を与えている。そして、知識とスキルの上には望ましい内的結果、最上段には望ましい外的結果が置かれている。

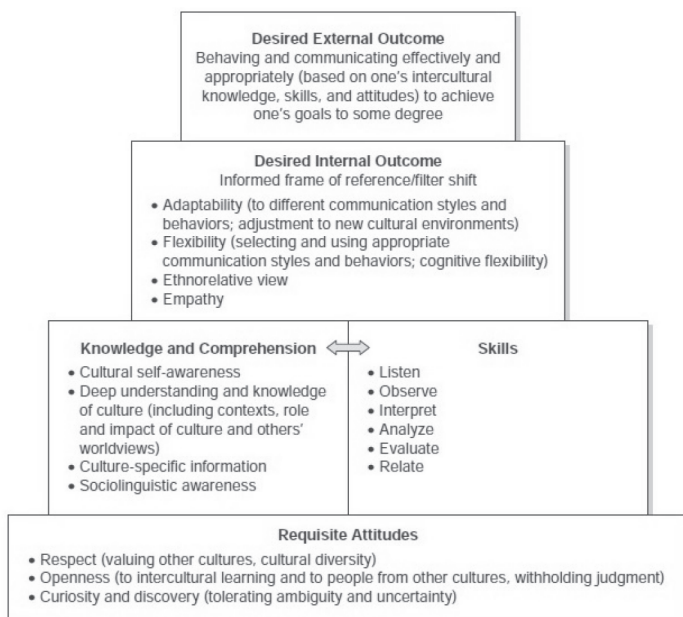


図 1 異文化間能力のピラミッドモデル (Deardorff, 2006)

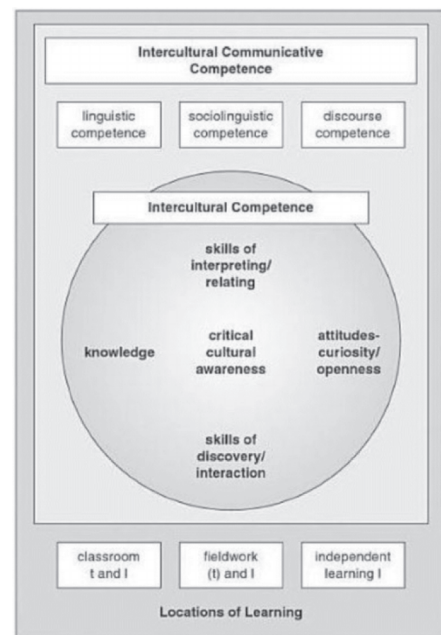


図 2 異文化間コミュニケーションモデル (Byram, 2009)

異文化間能力と似ている概念として、Byram (2009) が提唱した、異文化間コミュニケーション能力 (Intercultural Communicative Competence) がある。図 2 からわかるように、異文化間コミュニケーション能力には、「興味や広い心を含む態度 (attitudes-curiosity/openness)」「批判的な文化への気づきや知識 (critical cultural awareness)」「発見しエンターラクションするスキル (skills of discovery/interaction)」「理解し、関係づけるスキル (skills of interpreting/relating)」に加えて、言語を使ったコミュニケーションに関わる「言語能力 (linguistic competence)」、「社会的言語能力 (sociolinguistic competence)」、「談話能力 (discourse competence)」の 3 つが含まれている。言語に関する能力を除いてみれば、どちらのモデルも「態度」「知識」「スキル」がそれぞれの能力を構成する基礎的な要素と

なっていることは共通している。そこで、清泉女学院のプログラムは、異文化間能力を育むための「態度」「知識」「スキル」を身につけられる機会にすることを目標とした。

「態度」「知識」「スキル」について、もう少し詳しく述べたい。この3つを構成する要素は、Deardorff (2006) のモデルを参考に設定した。「態度」においては、他者に対してオープンであり、新しいことを学習するのに積極的であること、相手の文化を尊敬し、寛容であることが含まれる。Spitzberg and Changnon (2009) は、異文化間能力の根底には態度があり、態度の育成なしには知識やスキルは身につかないとしており、態度は異文化間能力育成の根幹であると位置付けた。「知識」には、相手の文化についての知識、自分の文化についての知識、社会的・個人的なインターアクションについての知識が含まれる。そしてこれらの知識が、表面的な浅いだけの知識にとどまらず、深いレベルに到達することが必要である。「スキル」には、聞く、観察する、解釈する、分析する、評価することが含まれる。これら、身につけたいことを取り入れながら、プログラム内容や活動を再考することにした。

### 3. 研修プログラムの改革

本格的に改革に着手した2014年当時も、清泉女学院には6つの海外研修プログラムが存在していた(表1)。2014年度の参加者はのべ56名であり、過去にも約60名から70名が参加をしているプログラム群であった。韓国、台湾、アメリカの研修先は姉妹校(韓国)および学術協定校(台湾、アメリカ)、オーストラリアのSun Pacific Collegeは現地語学学校であり、語学研修を委託している教育機関である。この時点での課題は繰り返しになるが、1) 研修における学びの目的が設定されていなかったこと、2) 事前研修が十分ではなかったこと、3) 研修の学びを振り返り消化する機会がなかったことという3点であった。これらの課題を解決すべく、2013年から改革に着手した。課題を解決し、プログラムを再設定することにより、「楽しかった以上の学びを参加者にもたらすこと」「自分の学びをしっかり認識し、その後の生活に生かすこと」ができるようになればよいと考えていた。手順としては、①プログラムの目的設定、②活動の基盤設定、③目的に基づいた活動内容の設定という順番で行った。

表1 2014年度清泉女学院海外研修プログラム

|             | 時期  | 研修先                             | 宿泊形態       | 交流言語     |
|-------------|-----|---------------------------------|------------|----------|
| 韓国姉妹校交流     | 夏休み | ソウル・漢陽女子大学                      | ホテル        | 韓国語・日本語  |
| 台湾学生交流      | 夏休み | 高雄・国立高雄第一科技大学                   | 学生寮        | 英語       |
| オーストラリア語学研修 | 夏休み | ケアンズ・Sun Pacific College        | ホームステイ     | 英語       |
| モンゴル文化研修    | 夏休み | ウランバートル郊外                       | ホテル・ホームステイ | 日本語(通訳付) |
| フィリピン文化研修   | 春休み | マニラ、ツゲガラオ                       | ホテル        | 英語       |
| アメリカ語学研修    | 春休み | ハワイ・Kapiolani Community College | ホテル        | 英語       |

#### 1) プログラムの目的設定

それぞれのプログラムにおいて、Deardorff (2006) の異文化間能力のモデルの「態度」「知識」「スキル」の3領域を念頭に目的設定にとりかかった。

まずは、すべての研修において、自文化と相手の文化を関連付けて考える問いを設定した(表2で

の下線部分)。研修の最終目的はこの問いに自分なりの答えを見つけることである。この問いは、「台湾と日本の文化の違いは何か」というような表面的な比較に終わる問いではなく、やや深く思考を巡らし考えることができるように設定した。これは、Deardorffが提唱する、表面的な浅いだけの知識にとどまらず、深いレベルに到達することが必要である、という点を考慮した結果である。

その後、知識（自文化、他文化）、態度、スキルについて、研修の内容を鑑みながらそれぞれの研目的を設定し、最終的には表2のようになった。

表2 各研修プログラムの目的

|                 |   |
|-----------------|---|
| 韓国姉妹校交流         | <ul style="list-style-type: none"> <li>・韓国と日本の今までの関係と、これから友好関係を築いていくにはどうしたらいいか考える（知識・自）</li> <li>・韓国文化の体験を通して、韓国の歴史や習慣を学ぶ（知識・他）</li> <li>・現地学生との交流では心を開き、積極的に異文化を知ろうとする態度を身に着ける（態度）</li> <li>・知識を得るために観察し、得た情報を分析して、自分の問いに関連付ける（スキル）</li> </ul>   |
| 台湾学生交流          | <ul style="list-style-type: none"> <li>・今までの台湾と日本の関係と、これから友好関係を築いていくにはどうしたらいいか考える（知識・自）</li> <li>・学生との交流や市内見学を通して、台湾の文化を学ぶ（知識・他）</li> <li>・台湾学生との交流では心を開き、積極的に異文化を知ろうとする態度を身に着ける（態度）</li> <li>・知識を得るために観察し、得た情報を分析して、自分の問いに関連付ける（スキル）</li> <li>・滞在中の英語を使った生活を通して、英語力を向上させる（言語能力）</li> </ul> |
| モンゴル文化研修        | <ul style="list-style-type: none"> <li>・モンゴルの生活と、日本の生活における価値観について考える（知識・自）</li> <li>・ホームステイ等を通して、モンゴルの文化を学ぶ（知識・他）</li> <li>・ホストファミリーとの交流では心を開き、積極的に異文化を知ろうとする態度を身に着ける（態度）</li> <li>・知識を得るために観察し、得た情報を分析して、自分の問いに関連付ける（スキル）</li> </ul>   |
| オーストラリア<br>語学研修 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・オーストラリアと日本の生活の違いを発見し、違いの背景には何があるのかを考える（知識・自）</li> <li>・ホームステイ等を通し、オーストラリアの文化を学ぶ（知識・他）</li> <li>・ホームステイでは心を開き、積極的に異文化を知ろうとする態度を身に着ける（態度）</li> <li>・知識を得るために観察し、得た情報を分析して、自分の問いに関連付ける（スキル）</li> <li>・日本語禁止の環境の中で、英語力をつける（言語能力）</li> </ul>             |
| カンボジア<br>文化研修   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・開発途上国の現状を知り、私たちができることについて考える（知識・自）</li> <li>・世界遺産の訪問を通して、カンボジアの文化を学ぶ（知識・他）</li> <li>・現地の人や子供たちとの交流では心を開き、積極的に異文化を知ろうとする態度を身に着ける（態度）</li> <li>・知識を得るために観察し、得た情報を分析して、自分の問いに関連付ける（スキル）</li> </ul>   |
| アメリカ語学研修        | <ul style="list-style-type: none"> <li>・パールハーバーの見学等から、日本とハワイの関係について考える（知識・自）</li> <li>・フラ体験や文化のクラスを通して、ハワイ文化のルーツには何があるのかを考える（知識・他）</li> <li>・現地学生との交流では心を開き、積極的に異文化を知ろうとする態度を身に着ける（態度）</li> <li>・知識を得るために観察し、得た情報を分析して、自分の問いに関連付ける（スキル）</li> <li>・英語の集中講義を通じて、英語力をつける（言語能力）</li> </ul>      |

語学プログラムであるオーストラリア、アメリカ、英語で交流を行う台湾では、語学能力の目的も設定した。フィリピン研修は2014年度は行われず、2015年からカンボジア文化研修となった。

## 2) 活動の基盤設定

目的設定後、各研修プログラムの内容を再考した。6つのプログラムがあるが、それぞれのプログラムに特長をもたせ、同じような活動が重ならないように考慮した。また、活動を組み立てていくにあたり、どのプログラムにも現地の人との交流をどんな形であっても組み込むようにした。これは、2013年から2014年に行った調査（藪田, 2015）において、短期海外研修から学んだことは何かについて分析を行ったところ、参加者の学びの根底にあったのは人々との関わりや交流であるということが示唆されたからである。参加者は人々との関わりの中で葛藤し、時には苦しみ時には喜びを感じ、自分が置かれている状況を観察しながら様々なことに気づいていた。そしてその気づきを新たな知識や視野、意欲、積極的な行動やコミュニケーションスキルの向上に結び付けていた。このようなことから、単に海外を訪れるだけではない、人との交流を通して学びを得ることができる活動を選ぶように心がけた。

姉妹大学や学術提携校を持っている韓国、台湾、アメリカでは現地学生との交流を組み入れた。台湾では相手大学が Teaching Assistant という制度を作り、滞在を通して台湾人学生がプログラムをサポートしてくれる体制を整えてくれた。韓国においても、韓国人学生が滞在を通してサポートしてくれた。アメリカでは現地大学のクラスを訪れ、ハワイ文化、日本文化について学ぶ機会を得た。モンゴルとオーストラリアではホームステイを通して、カンボジアでは現地 NGO の施設訪問とボランティア活動で訪れた孤児院で現地の子供たちと触れ合う機会を設定することができた。

## 3) 目的に基づいた活動内容の設定

研修内容は、研修の目的が達成されるように活動を再考した。再考するにあたって考えたことは、前述したように「楽しかった以上の学びを参加者にもたらすこと」であった。

姉妹校や学術協定校には研修プログラムの目的を伝え、できるかぎりその達成のために活動を組んでもらえるように依頼を行った。また、本学の学生だけのメリットにならないように、双方の学生が何かを学び取れるものであるようにすることにも重点をおいた。台湾では台湾人学生が滞在中ほぼ毎日行動を共にしてくれるが、授業内容や活動も、彼らにとっても新しい知識を得たり、普段使わないスキルを使ったりできるものにした。例えば、少数民族の伝統工芸を体験するセッションは、台湾人学生にとっても新鮮であり、中国語を日本人に教えるセッションでは、普段あたりまえに使っている母語をどうすれば外国人に上手に伝えられるかに工夫を凝らすことは、彼らにとっては新しい挑戦となる。韓国でもアメリカでも、自分たちの文化を外国人に教えるということは、改めて自文化を見直す機会となり、新しい知識を得る日本人学生と共に学びを得ることができた。

カンボジアとモンゴルでは、ボランティア活動を取り入れた。もともと本学ではボランティア活動が活発に行われており、海外でも参加してみたいという学生の要望は以前からあった。カンボジアでは孤児院でのボランティアを、モンゴルでは小学校でのボランティアを取り入れた。どちらも子供たちとの交流が主な活動であるが、同行する現地通訳の方から、子供たちがなぜ孤児院で暮らさなければならないのか、小学校から寄宿舎で学ぶ背景には何があるのかを聞くことにより、現地の状況に対する知識を深められるようにも配慮した。

## 4. 事前研修・事後研修の導入と単位化

今回の改革のもう一つの柱である事前・事後研修と単位化について述べる。改革前までも事前研修は存在していたが、研修ごとに内容が異なり、またその内容も渡航手続きに関することや荷物の準備

などが主な内容であった。そこで、事前・事後研修にも Deardorff のモデルを適応し、事前研修→研修  
 本体→事後研修を一体化し、その中で異文化間能力を育成できるように試みた（図3）。



図3 研修プログラムと異文化間能力との関係

授業やその他行事との兼ね合いを考え、事前研修は5回、事後研修は2回行うことを決定した。内容は表3、表4の通りであり、すべての研修において同じカリキュラムで行うようにした。このことにより、以前は研修ごとに説明をしていた渡航に関する注意点や、海外での行動に関することも一斉に講義を行うことができ、人的負担も時間的効率も上げることができた。また、学部や学科が異なる学生が参加することから、事前事後研修の時間確保が難しくなっていたが、研修の時間を通常の時間割に組み込み、授業の一部として1回90分行うこととして、この点も解消することができた。

表3 事前研修内容

|   | テーマ                       | アクティビティー                                       |
|---|---------------------------|--|
| 1 | オリエンテーションとメンバー紹介          | アイスブレイキング、自己紹介、チームビルディング                       |
| 2 | 異文化理解ワークショップ              | 異文化適応、ステレオタイプ、言語・非言語コミュニケーション                  |
| 3 | 渡航先の研究                    | グループに分かれてテーマを選定、研究を行う<br>発表用にハンドアウトかパワーポイントを作成 |
| 4 | 渡航先の研究発表<br>渡航の注意点、海外での行動 | 研究結果を発表<br>海外渡航での注意点を理解する                      |
| 5 | 渡航直前の確認                   | 集合場所確認、プログラムの最終確認、チケットや保険証書の受渡し                |

表4 事後研修内容

|   |                          |                                  |
|---|--------------------------|----------------------------------|
| 1 | グループでの振り返り<br>文化祭発表用分担決め | 研修の振り返り<br>文化祭で発表するポスター作成の分担を決める |
| 2 | 研修成果発表                   | 個人で研修成果について発表を行う                 |

### 1) 事前研修

事前研修で新たに取り入れたことが2つある。1つ目は異文化理解のためのワークショップを取り

入れたことだ。参加者の中には初めて海外を体験する学生も少なくない。学生によっては異文化コミュニケーションを扱う授業を履修している場合もあるが、全員ではない。日本を離れて生活するとき、自分がどのような行動をとればよいのか、意思表示はどうしたらいいのか、滞在先の文化で好ましくないことは何なのか、全く知識がないまま渡航してしまうのはあまりにも危険である。このワークショップでは、1) 初めて誰かに会ったとき、2) 言語によるコミュニケーション、3) 非言語のコミュニケーションについて、ロールプレイを取り入れながら学ぶ。例えば、日本人は表情の変化があまりなく、外からは何を考えているのかわからないと思われがちなので、すこし大ききくらい表情を作るとよいこと。日本人は文脈依存が高いためあまり言葉で思いを表すことをしないが、西洋などの文脈依存の低い国でははっきり言葉に出して言わない限り相手には伝わらないことなど、異文化コミュニケーションに必要なスキルをできる限り取り入れた。

2 つ目は、渡航先のリサーチを取り入れたことである。これまでは、滞在都市の情報、相手国の文化・習慣など必要な情報は大学側から印刷物で配布していたが、それでは知識として参加者の中に蓄積されていなかった。また、与えられる情報であったため、研修を創っていくのは自分たちだという意識も低かった。そのため、事前研修のリサーチでは、学校側が知っていてほしいことに加え、参加者が知りたいことを話し合い、研修プログラムごとにリサーチのテーマを設定することにした。そして設定したテーマを数人で担当して調査し、同じ研修に参加するメンバーに発表する方法に変更した。その結果、自ら知りたいことを能動的に調べることによって、興味もわき研修に対する意識の高まりも見ることができた。

## 2) 事後研修と単位化

改革前は事後研修がなく報告レポートの提出のみであったが、2 回の事後研修を行って、研修で学んだことを内省する機会を設けた。

研修期間中は毎日の活動に追われ、現地の生活に対応することで精いっぱいであるため、研修を通して自分が何を学んだのかを考えるには、研修が終わってからゆっくりと活動を振り返ることが必要である。そして、その振り返りと研修目的で設定されたテーマに対する自分なりの答えを研修報告レポートという形で文字化して提出させた。事後研修の 1 回目にはグループで学びを話し合い、2 回目には個人として研修の成果を発表する機会を持った。自分の思いを言葉にして参加者同士が分かち合うことによって、学びを深めることもできた。また、それに加えて文化祭では海外研修の内容を学外の方にも知っていただくためにポスター発表も行うことにした。

上記のような事前研修 5 回、事後研修 2 回、研修報告レポートの提出をもって 2 単位を付与することを、大学の教務とも話し合って決定した。

## 5. おわりに

2014 年に本格的に海外研修のプログラム改革に着手し、プログラムの目的設定、活動内容の再考、事前事後研修の導入、研修の単位化を行ってきた。プログラムの目的設定においては、Deardorff(2006)の異文化間能力のピラミッドモデルを基盤とし、研修中の活動は目的の達成に結び付くように設定した。事前研修では能動的に知識を獲得し、渡航先の文化について興味をもって研修に臨むことができるように、リサーチ活動を取り入れた。また、渡航後に直面する異文化にどの様に対応したらよいか、ロールプレイをしながら異文化コミュニケーションスキルの獲得も試みた。これまでは研修報告のレポートのみであった事後の活動を、レポート作成に加えて、グループでの振り返りと個人での成果発

表も行った。また、レポートにおいても、活動の報告だけではなく、研修ごとに設定されたテーマについて自分なりに考えて論ずるといふ、やや深い文化についても目を向けられるような仕組みも作った。そして、事前研修から事後研修までの活動を単位として認定できるようにしたことは、国際交流活動を学びとしてとらえる体制を作ることに少なからず寄与することができたのではないかと思う。

2014 年以来毎年少しずつ積み上げてきたものが 2016 年度の研修でようやく形になり、添付資料のような研修内容が一目でわかるようなリーフレットを作成して説明会で配布を行うに至った。今までの改革がどのような成果をもたらすかは、今後引き続き検証が必要である。2016 年度の夏休み研修の参加者が提出したレポートを見てみると、研修期間の様々な体験とテーマを結び付け、さらに新たなリサーチも加えたレポートが提出されるようになり、研修の学びは一段深いものになったように感じる。また事後に行ったアンケートでは、事前研修で行った異文化コミュニケーションスキルを現地でも使ってみたという記述も見られ、事前研修は一定の成果を出しているのではないかと思われる。

最後に、今後の課題を 2 点挙げたい。1 つは効果検証の仕組みを整えることである。短期であつても海外体験が参加者に変化をもたらすことに異論を唱える者は少ないであろうが、その効果の可視化は難しいことも事実である。現在は国際交流センターで設定したアンケート項目を用いて参加者自身が自己評価をする方法をとっている。この項目は目的やカリキュラムに合致している必要があるが、現在はプログラムの全体的な印象を尋ねる質問のみであるため、効果を測定できる項目を追加する必要がある。

2 つ目は、海外研修で高められたモチベーションの維持である。海外研修中及び帰国直後の参加者のモチベーションは非常に高い。異文化学習や語学学習にもっと取り組みたいという記述が報告レポートでも頻繁にみられる。現地学生との交流やホームステイの経験から、自分の語学力不足や知識不足に参加者自身で気がつく場合も多い。また、異文化体験や新しい知識を得ることの楽しさを身をもって感じ、さらに経験を積みたいと思っている学生も少なくない。このモチベーションをなんとか次のステップにつなげられるような仕組みづくりが必要である。海外研修プログラムは短期間であるため、海外滞在期間だけですべてを得ることは不可能であるが、前後の授業やその他の活動を組み合わせることで、長期間にわたって異文化間能力を育成していくことは可能になっていくと考える。

本学において、海外研修プログラムは学生に貴重な体験を与えていることは確かである。その体験をより深い有意義な学びに変えていくためには、今後またゆまぬ努力が必要である。世界の情勢も、学生の質も変化し続けていくが、参加者の異文化間能力を育成するという根本を大切に、これからも改善を続けていきたい。

結びにかえて、今まで清泉女学院で国際交流活動に関わってきた方々、現在の海外研修プログラム実現のために共に苦勞をしてくださった教職員の方々に、心から感謝を申し上げたい。

## 引用文献

- 産学連携によるグローバル人材育成推進協議会. (2011). 『産学官連携によるグローバル人材の育成のための戦略』 [http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2011/06/01/1301460\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2011/06/01/1301460_1.pdf)
- 藤原孝章. (2013). 「スタディツアーにおけるプログラムづくり—「歩く旅」から「学ぶ旅」への転換」『国際理解教育』 Vol. 20, 42-50.
- 藪田由己子. (2015). 「短期海外研修の学びと異文化コミュニケーション教育」『清泉女学院短期大学研究紀要』 33, 65-68.



- Byram, M. (2009). The intercultural speaker and the pedagogy of foreign language. In D. K. Deardorff (Ed.), *The SAGE handbook of intercultural competence*. NewburyPark, CA:Sage.
- Deardorff, D. K. (2006). Identification and assessment of intercultural competence as a student outcome of internationalization. *Journal of Studies in International Education*, 10, 241-266.
- Deardorff, D. K. (2009). Implementing Intercultural Competence Assessment. In D. K. Deardorff (Ed.), *The SAGE handbook of intercultural competence*. NewburyPark, CA:Sage.
- Spitzberg, B.H. & Changnon, G. (2009). Conceptualizing intercultural competence. In D. K. Deardorff (Ed.), *The SAGE handbook of intercultural competence*. NewburyPark, CA:Sage.

#### SUMMARY

This paper describes the reformation process of study abroad programs in Seisen Jogakuin College. The reformation started in 2013 and completed in 2016 with six study abroad programs. Deardorff Pyramid Model of Intercultural Competence (Deardorff, 2006) was used as a basic concept of the programs. This model proposes that attitude, knowledge and skills are the essential elements of intercultural competence. After the reformation, the new study abroad program consists of three parts: pre-training, study abroad and post-training. Pre-training sessions focus on acquiring intercultural communication skills and knowledge on the target culture. Post-training includes reflection of the program and individual presentation on accomplishment through the overseas experience.

付録資料 研修内容紹介シート（例）

|           |   |      |           |
|-----------|---|------|-----------|
| プログラム名    | カンボジア文化研修   | 参加費用 | —         |
| 滞在都市      | シェムリアップ   | 研修先  | シェムリアップ周辺 |
| 実施時期      | 春休み（2月中旬～下旬）  | 実施期間 | 7日間       |
| 定員        | 12人   | 教員引率 | あり        |
| プログラム使用言語 | 日本語（現地通訳あり）   | 宿泊形態 | ホテル       |
| プログラム目的   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・発展途上国での現状を知り、私たちができることについて考える（知識・自）</li> <li>・世界遺産の訪問を通して、カンボジアの文化を学ぶ（知識・他）</li> <li>・現地の人や子供たちとの交流では心を開き、積極的に異文化を知ろうとする態度を身に着ける（態度）</li> <li>・知識を得るために観察し、得た情報を分析して、自分の問いに関連付ける（スキル）</li> </ul>  |      |           |
| プログラム概要   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・「かものはしプロジェクト」訪問<br/>                     貧困女性の支援を行っているNGOかものはしプロジェクトのコミュニティーファクトリーを訪問し、国際協力の現状を視察し、貧困家庭の現状と問題点、ファクトリーの役割について学ぶ</li> <li>・アキーラー氏の地雷博物館見学<br/>                     内戦等を通して、カンボジアには多くの地雷が埋められており、今も撤去が続いている。その現状を博物館の展示などを通して学ぶ。</li> <li>・児童養護施設でのボランティア<br/>                     施設で生活する子供たちと、日本の遊びを教えたり、カンボジアのダンスを習ったりしながら交流する</li> <li>・世界遺産である、アンコールワット、アンコールトム、タ・プロームの遺跡を見学、オールドマーケットで買い物もできる</li> </ul> |      |           |
| 参加条件      | <ul style="list-style-type: none"> <li>・体力があること、暑さに強いこと</li> <li>・児童養護施設でボランティアをするので、子供と遊ぶのが好きなこと、歌や楽器が弾けること、絵が描けるなど特技があるとよい</li> </ul>   |      |           |
| 単位認定      | 事前5回、事後2回の研修への参加、研修後のレポート提出、研修成果の発表をもって2単位を認定する   |      |           |